

パネルディスカッション「日露戦争はどう語られてきたか～明治末・満州・再生～」

## 「物語る作法」 ——文学と歴史の対話——

小 風 秀 雅\*

パネルディスカッション「日露戦争はどう語られたか」は、文学と歴史の対話の可能性を探ることを目的に、大学院の小風ゼミから発展した研究会のメンバーである山田順子、加藤恭子、菊地優美、芳賀祥子に、村山佳寿子、古結諒子を加えて、小風秀雅の司会で行った。

### 学際性の要望に応じて

この文学と歴史の対話の可能性を探るパネルディスカッションの構想は実は10年以上前に遡る。

大学院国際日文学専攻が1999年に誕生してからすでに15年が経過し、その間、7月の国際日文学シンポジウム、12月のコンソーシアムの二つの国際学会が開始され、交流の蓄積も進んできた。ふたつの国際学会に最初からかかわってきた筆者としてもこのように定着したことは望外の喜びである。

だが、より交流の密度の濃い交流協定校とのコンソーシアムでは、開始当初から、日本に関する学際的研究に日本側がどう取り組んでいるのか示してほしい、という指摘が海外側から寄せられ続けてきた。これは、国際日文学が真にグローバルな研究分野として成立するためには、日本側の努力が必要である、という要望でもあった。

しかし、こうした要望に日本側が応えることは、領域によって研究手法も対象の捉え方も異なる

り、研究者同士の学際的研究交流が進んでいない日本の現状ではなかなか困難である。コンソーシアムが10年を迎えるにも拘わらず、応えてこられなかったことについては、筆者にとっては心残りであり続けてきた。

今回のパネルディスカッションは、こうした積年の思いに対する中間レポートのつもりで企画したものである。狙いは、研究手法も対象の捉え方、すなわち「物語る作法」の違いを超えて、文学と歴史の対話を行おう、というものであり、タイトルにある日露戦争はその舞台に過ぎない。

### 歴史と文学の壁を超えて

歴史と文学の対話という、ある対象に対してそれぞれの観点からの分析をすり合わせ議論すること、をイメージするのではなからうか。手法を異にするふたつの領域において相互に成果を吸収する、という点では研究者同士では十分に意味があるといえようが、しかしこれでは、海外からの要望に応えることにはならない。

文学における歴史的視点、歴史学における文学的視角の吸収といった互いの研究手法を取り入れて、研究手法の拡大を図ることがまず求められよう。歴史研究者の書いた論文が文学研究者から評価され、文学研究者の論文を歴史研究者が吸収することが学際的研究であるという視点から見れば、それでもかなりの努力を要する作業である。しかし、これでもまだ不十分ではないか、と出てきた。なぜなら、相互に共有される「場」が成立し

\*お茶の水女子大学教授

ているとは言えないからである。

この「場」の成立のためには、双方がお互いの研究手法に興味を抱き、自らの研究手法に固執することなく、互いを尊重して交流することを目指す研究者自身の意識の改革が不可欠である。歴史学は事実が重要であると言って歴史研究者が実証を振りかざし、文学研究者が文学の神髄を追求して作品分析に沈潜しては、この「場」はまず成立しない。これを歴史研究者から見ると、フィクションの世界を歴史研究に取り入れることは無意味である、という意見は当然出てくるであろう。また逆に、文学研究でも、作品の時代背景に関する分析は必要だろうし、作品分析ばかりでなく、作家論や、文学思潮の研究なら歴史とも接点をもてるであろうに、という意見もありうるであろう。

自分の足りない部分をお互いに補完しあっていくことであらたな地平を探ろうとする姿勢が必要である。

しかし、では具体的にどうしたらよいのか、ということになると、たちまち行き詰ってしまう。先年逝去された本学の菅聡子氏とはこうした点についてたびたび意見を交わす機会があり、お互いに関心を持ちあえば可能であろう、という感触は得たのであるが、氏の急逝により、それ以上の進展を見ることはかなわなくなってしまった。

それが、一昨年、3名の日文のドクターコースの院生が私の院ゼミに出席してくれたことから再び進みだした。院ゼミはあくまでも歴史研究の場であるので、交流の「場」にはなりえない。そこで、次の年にサブゼミの形で読書会を開始した。

われわれは、まず文学作品の分析における歴史的要素の解明の必要性に着目して研究会を進めた。その中間的な成果が今回のパネルディスカッションである。

パネルディスカッションは、ふたつの作品分析とその歴史的背景への歴史的アプローチと、日露戦争に対するそれぞれのアプローチの比較、から

なっている。個々の報告の内容については、それぞれのペーパーに譲るとして、ここでは全体の筋をまとめておきたい。

## 女性の国民化をめぐる

第一の作品分析は山田順子氏による小栗風葉『青春』の分析である。山田氏は、日戦後における平和的膨張論の風潮の中、また女性の国民化が主張される中、結末におけるヒロイン繁の満州行きこそが極めて歴史的事象（平和的膨張論）の影響を受けているとして、その内実を丁寧に検証することの重要性を指摘された。

山田氏の表現によれば「日本の内地で婚前交渉、妊娠、墮胎により傷物となった女性が、日本の外にある満州において「国民」に組み込まれていく過程」、すなわち、満州の現地の女学校の教師として赴任する主人公の人物造形を理解する上で、テキストの歴史的背景を探ることの意義を強調された。

これに対して、加藤恭子氏は、日露戦後に実際に中国の女子教育の普及のために日本女性が渡清した実例として河原操子を取り上げ、女高師出身であることを含めて、その社会的存在がヒロインと類似していることを指摘され、女教師派遣事業を取り上げた新聞報道は、作品中の平和的膨張論の風潮の実態をよく示している、とされた。同時に、女子教員派遣事業は国家の関与はなく、婦人団体による国際交流事業として展開されたことも指摘された。

満州行の個人的動機と社会的評価の乖離のなかでこの作品が成立すると考えるとき、後者の歴史の実態を明らかにすることは、作品分析により深みを加えることとなるであろう。

## 唱歌と邦楽の対比について

第二の作品分析は、菊地優美氏の田村俊子『海

坊主』である。小学校の唱歌の教師である娘＝「私」と、「殖民地」の「大きな酒樓」で「抱妓」たちに「三味線の稽古」をつける母親との葛藤を描いたこの作品を、菊地氏は、「“国民”編成の一部を担った唱歌の教師という職業に就く「私」と「日本帝国主義において重要な役割を担った公娼制度に加担していく母」という対照で捉えた。

主人公が、「熱帯の殖民地」から帰還する母との確執の果てに、「海坊主」に「魅入られた」と語る母によって〈帝国〉の脆弱さが明るみに出されることに怯え、「打ち据ゑ」ようとして母親に向かっていくラストシーンは、まさに日露戦後でなければ、設定できない。その意味で『海坊主』は時代の産物ということができのではないだろうか。

これに対して村山氏は、母と娘の複数の対立要素のうち、唱歌と三味線に着目し、この対比が、単なる洋楽と邦楽の対比、すなわち近代と伝統の対比ではないことを、社会史的に指摘した。稽古事が女性中心に行われるようになったのは近代になってからのことであるとして、近代における伝統音楽の担い手は近世の男性から女性へと転換したことを指摘するとともに、女性達の間で稽古事が盛んに行われるようになる要因として、稽古事をする目的が「師匠になる」という具体的なものになってくること、すなわち収入源として重要視されるようになってくることを指摘された。

女性が伝統音楽を稽古するというのも近代的な要素として捉える必要があるという指摘は、母娘の葛藤の理解にさらに深みを加えることになるであろう。

## 日露戦争の捉え方

以上の作品をめぐる文学と歴史の対話は、一つの試みではあるが、作品の時代背景を理解することが作品分析をさらに深めることにつながる可能性は示されたように思われる。

しかし、時代の理解には歴史と文学では違いがあることも事実である。この点について、日露戦争の語られ方について、文学と歴史から自由に報告してもらったのが、芳賀報告と古結報告である。

芳賀氏は、文学の視点から、昭和戦前期の女性雑誌における日露戦争の取り上げ方について分析された。

大正・昭和初期においては、日露戦争の「英雄」たちの家庭や妻子をとりあげ、「英雄」をうむ土壌としての「家」を強調する一方で、『婦人公論』などでは、「軍国主義的無自覚な家庭教育を捨てて、母親が真に全人類に対する愛を其子供に植えるならば世界の平和は、必ず実現されるものと思ひます。」といった主張もあった。しかし、日中戦争が開始されると、「日露戦争」は参照し見習うべき「戦争」として表象されてゆく、とされ、日露戦争の扱われ方は時代に大きく左右されることを指摘された。最後に現在のサブカルチャーにおける日露戦争の取り上げられ方についても言及され、戦争の現実感が脱落した状況を指摘された。

これに対して、古結氏は、歴史の視点から、現在でもよく「日清・日露」とセットにされて説明されることについての問題を提起され、歴史的段階の違う二つの戦争を、日本史の視点から連続して理解することの問題点を指摘された。日露戦争がどのような歴史的文脈の中で勃発した戦争であったのか、を扱うことはそのこと自体が大問題であるが、古結報告は、その点について、国際的観点から簡潔にまとめられ、世界史的視野から日露戦争を理解することの必要性を指摘された。

## パネルディスカッションを終えて

時間が限られていたこともあり、十分な議論ができなかったが、参加者からは貴重な意見を頂いた。とくに、リュブリャナ大学のベケシュ教授は、パネルディスカッションの試みを評価され、歴史学からの試みの可能性について指摘された。ご指

摘の通り、今回は文学における歴史的観点の有用性についてまとめたという性格が強く、歴史学における文学的視点の活用という点では不十分であったことは否めない。

どのような取り上げ方をすれば、歴史学のなかで文学の強みを引き出せるのだろうか。あるいは、文学作品を歴史史料として扱う可能性はあるのだろうか。具体的な方法はまだ思いつかないが、可能性を考えるだけでワクワクしてくる。

また、女性の取り上げ方についてもご意見を頂いた。これは意図したわけではなかったが、期せずしてジェンダーの論点を多く提起するパネルディスカッションとなったことも貴重な成果であった。こうした議論なら、文学と歴史の枠を超えて議論が成立する可能性は、充分にあることが期待できそうである。

最後に、試行錯誤の途上でのパネルへの挑戦だったので、どこまで達することができるか不安であったが、パネラーたちは120%の成果で期待に応えてくれ、私の思いを形にしてくれた、と思うのであるが、いかがであろうか。